

# 心友会だより

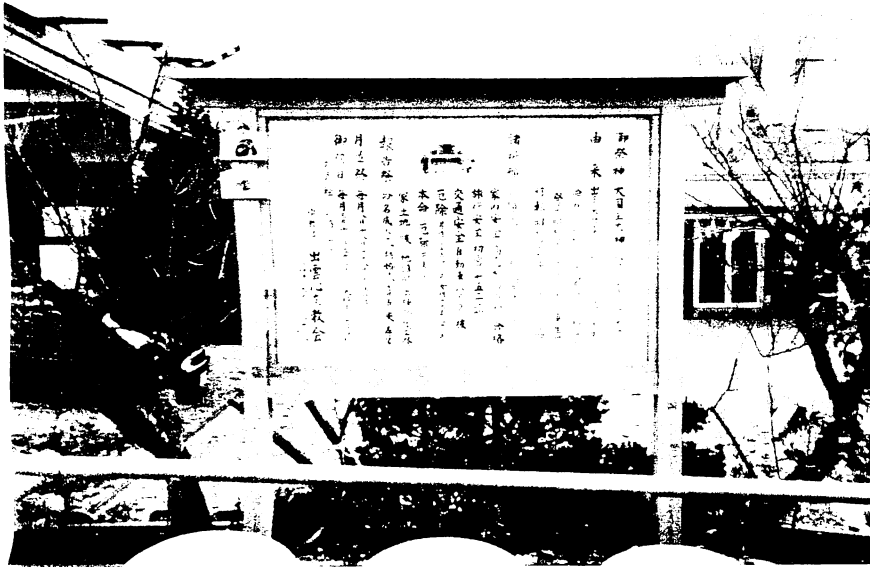
第 3 6 5 号

昭和44年6月1日創刊  
平成16年9月8日発行  
発行所及責任者  
川崎市多摩区東生田4-13-17  
電話番号 044-976-0708  
郵便番号 214-0031  
郵政法人 心友会  
宗教兼 佐藤 武彦  
編集兼 毎月8日1回発行  
1部150円 (送料共)  
年間購読料1,800円

## 秋季祖霊大祭

我々日本人は、はるか昔から、先祖を祀るといふことを非常に厳格に行なつて

いる民族です。この事は、以前から何度も申し上げておりますが、それではどの



本殿の階段上の布教用看板

くらい「昔」の話なのでしょう。日本において、この事はつきり形として現われているのは古墳時代といつてよいかもしれません。もちろん縄文時代の土偶を埋める行為も死者に対する愛情表現であり、愛する者を失った悲しみの表現でもあるでしょう。そして、死者の霊魂の存在を考えていたものとも思われます。

では、話を古墳時代にもどしますが、「古墳」とは一体何なのでしょう。一般的には、当時の権力者が自分を誇示する為にくらせた墓だといふ事が言われています。他には巨大な古墳をつくることによつて、自分を一般の民衆から区別し、神聖化をはかったのだという説もあります。

いずれにしても、この頃から一般の人々も死者を埋葬するという習慣が確立さ

れたと思われまふ。

民俗学者の柳田国男氏によれば、神道では、死の直後の死者の霊を「死霊」と呼びます。この死霊は個性をもち、死骸をもつています。子孫がこの死霊を祀ることによつて、死霊はだんだん個性を失い、死骸がとれて浄化されて行きます。一定の年月が過ぎて、完全に浄化された死霊は、「祖霊」となります。死霊の段階では山の低いところにいるのですが、これが昇華、浄化されて祖霊となるにしたがつて、山の高いところに昇つて行くわけです。

そして、高山の上に昇るにつれて、死霊は少しずつ穢れや悲しみから超越して清い和やかな神(祖霊)になります。これが柳田国男氏の『山上昇神説』です。したがつて、日本人の死後の世界観は、仏教のそれではなく、神道の考え方であると断言してよいと思われまふ。

今でこそ、彼岸とかお盆とか先祖供養の祭事は、あたかも仏教の行事であるかのように粉飾され行なわれて

おりますが、元来は神道の祭事に他なりません。

日本人の心の中には、四季を通し、先祖の御霊を偲んで墓詣りをしたり、また御先祖様が家に帰つてくるという、残された子孫と先祖との一体感、先祖が守護霊になつて守つて下さるのだという、常に自分の肉体の親に対する感謝は、魂の親である大神様を慕う信仰と同一に、脈々とひきつがれております。

古代より神道の宗教的施設として神社が創建される様になつてから、その後に神社は主として村落共同体の祭り、すなわち春の豊作を祈る祭り(祈念祭)、秋の収穫を感謝する祭り(新嘗祭)を行なう機関となり

神主は、その機能を果たすだけで安閑としておりました。それに対して人生問題に対するすばらしい教学を持つていた仏教は五三八年(五五二年説もあり)伝来すると、日本の習慣や文化などにすばやく融合し、人の生死に対しても解答を与えてくれました。

こうして、葬祭とその後の儀礼は、一切仏教と言つて良い程になつてしまいましたが、もともとは総て神道で行なわれていました。今年も秋季祖霊大祭が近づいてまいりました。

皇室におかれましても、秋季皇室祭が神道行事としてなされ、一般国民に先祖供養の大切な事を率先して範を垂れていらつしやいます。

古代から幽顕一体の神として大國主大神は、私たちの生死を司り、死後の霊魂の安定を計つて下さつていたのです。

日本中には八百萬の神々がいらつしやいますが、その中で私達の死後の霊魂の安定まで面倒をみて下さるのは、幽世大神となられました大國主大神以外にはないのです。この事は、しっかりと心に思いとどめて頂きたいと思ひます。

私共でも秋季祖霊大祭を九月二十三日(木)に仕えさせて頂きますので、万障お繰り合わせの上、是非おまいり下さいませ。